

中国周辺の漢字関連文字について

吉池孝一

一

中国の周辺に位置する現在と過去の文字のうち、漢字に由来する文字群および漢字と関連の深い文字群を「漢字関連文字」と呼ぶことにする。その中身は、ベトナムの字喃(チュウ・ノム)や日本の仮名など漢字から作られた文字、遼の契丹文字や西夏の西夏文字や金の女真文字など漢字に似せて創製された文字、モンゴル時代のパスパ文字や李朝時代のハングルなど漢字と系統を異にするが関連がある文字などからなる。漢字関連文字という枠組みの特徴は、漢字と系統を異にする文字を含めたところにある。このような枠組みを設定した意図を述べると次のようである。

東アジアをコミュニケーションとメディアという点から見た場合、文字の問題が重要な一面として浮かび上がってくる。そこで、古今の使用文字を記入した世界地図を眺めると、東アジアには特徴を異にする文字が集中しており、この地域が文字の宝庫であることが了解できる。地図上には多様な文字が並立しているように見えるけれども、そこには漢字(狭義の漢字、すなわち漢語および漢語の祖先を表記した文字)とそれ以外、すなわち、中心と周辺という構造がある。

紀元前1300年頃の甲骨文字より現代の簡体字(簡略体)の漢字に至るまで、漢字は三千数百年に渡り、東アジアの文化を支える柱であった。そこで、周辺の諸民族が情報伝達の道具を求め、柱たる漢字・漢文に如何に近づき、そこから如何に離れたか、ということが問題となる。いま少し一般化して言うならば、異なる民族の接触により何が起こるかということにつき文字を通して見てみようということでもある。このような問題の考究において漢字関連文字という枠組みは有用であろう。

二

そこで、漢字関連文字に含まれる文字がこれまでどのように扱われてきたかということにつき、西田龍雄氏の説により確認をする。

まず西田1981(注1)をみると次のようである。

1. 漢字系文字

a. 漢字

b. 派生漢字

1. 漢字を表音文字として借りる型：貴州省の苗(ミャオ)族や侗(カム)族の文字、日本の万葉仮名

2. 漢字を表意文字として借りる型：侗(カム)族の文字

3.漢字の字形を借りて、自国語の発音に合せ、意符と音符をもつ新しい組み合わせ字を作る型：ベトナムの字喃(チュウ・ノム)、広西省の壮(チュワン)族の文字

4.漢字の字形自体を改変して、自国語表記の新しい文字体系を作り出す型：日本の仮名

c.擬似漢字（漢字を模倣して作った文字）：契丹文字、西夏文字、女真文字

文字の系統により「漢字系文字」を設定し、その下に「漢字」「派生漢字」「擬似漢字」という類をたてる。次に、派生漢字の下に1から4の型を置く。こちらは漢字を利用する方法を整理したものである。

次に西田 2002（注2）をみると次のようである。東アジアの漢字系文字を五種に分類する。

漢字系文字

- 一、正統漢字（漢語を表記するために造られた文字。時代とともに字形と字数は変遷を重ねた）
- 二、変用漢字（正統漢字の字形を表音的に、或は全く別の音価や意味を与えて使う文字）：哈尼(ハニ)族、侗(カム)族、傣(リス)族など
- 三、変形漢字（正統漢字の偏・旁・冠などを自己の言語形に適合させて組み改め、変形した文字）：字喃、壮方塊字、苗文字など
- 四、派生漢字（正統漢字の字形をもとに、それをくずして新しい字形を造り出した文字）：仮名、女書
- 五、擬似漢字（正統漢字の字形または構成原理を模倣して、新しく創造した文字）：契丹文字、西夏文字、女真文字

漢字系文字を「変用漢字」「変形漢字」「派生漢字」「擬似漢字」に分類する法は、早くは西田 2001（「東アジアの諸文字」『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』）に見える（注3）。しかしながら西田 2001 では用語の定義が明示されていないため西田 2002 に拠ることとした。

両説は次のように対応する。

西田 1981

西田 2002

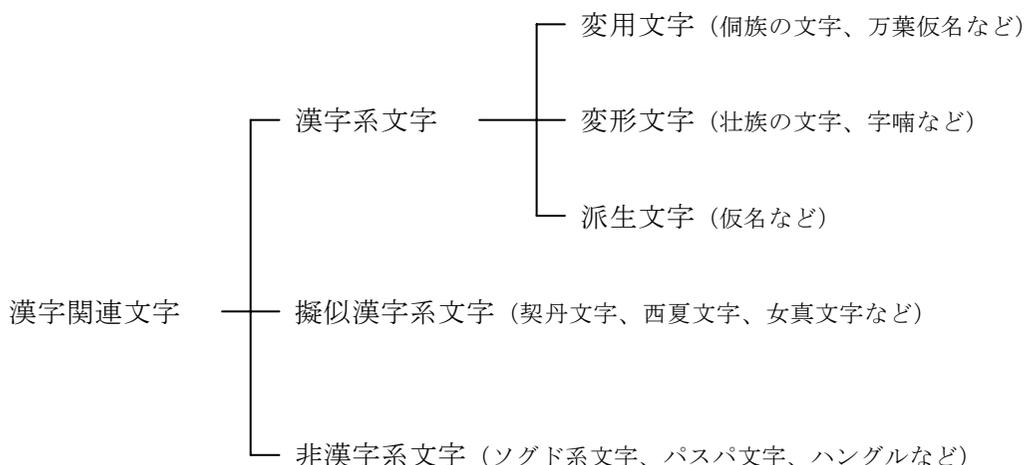
- | | |
|------------------|--------|
| 1. 漢字系文字 | 漢字系文字 |
| a.漢字 | 一、正統漢字 |
| b.派生漢字 | |
| 1.漢字を表音文字として借りる型 | 二、変用漢字 |

- 2.漢字を表意文字として借りる型・・・・・・・・二、変用漢字
- 3.漢字の字形を借りて新しい組み
 合わせ字を作る型・・・・・・・・三、変形漢字
- 4.漢字の字形自体を改変した新しい文字の型・・・・・・・・四、派生漢字
- c.擬似漢字・・・・・・・・五、擬似漢字

西田 1981 にみえる漢字利用の型 (1,2,3,4) は西田 2002 の二、三、四に対応する。「派生漢字」の用法は異なるけれども、基本的な枠組みに変更はない。

三

先に、漢字に由来する文字群および漢字と関連の深い文字群を「漢字関連文字」と呼ぶこととした。そこで、漢字に由来する文字群については西田 1981 及び西田 2002 を参考にして用語をやや改め、新たに非漢字系の文字群を加えて諸文字の関係を図示すると次のようである。



上図は、文字の系統分類を利用しているけれども、文字の系統分類ではない。系統分類であるならば、漢字系文字には漢字を含めなければならないところであるがそれはない。上図は、文字の系統ではなく、文字組織全体から見た漢字との関連性によって分類を試みたものである。なお文字組織は、字形を形作る文字要素、文字要素を組み合わせる文字を作る原理、表音と表意の方法、縦書き・横書き・分ち書きなどの文字配列法よりなる。

さて、「漢字系文字」と「擬似漢字系文字」と「非漢字系文字」は並立する。漢字系文字は漢字の文字要素から作られた文字群を一括したものであり、その下に漢字の利用法より分類した「変用文字」「変形文字」「派生文字」(「漢字系変用文字」等とする

場合がある)の三種をたてる。変用文字は既存の漢字を表音的に使ったもの及び訓読したもの、変形文字は漢字の文字要素をそのまま活用し組み替えて作ったものである。派生文字は、漢字の字形を改変して作り出した新しい文字であり、漢字の字形に似ていないけれども漢字との間に派生関係が認められるものである。変形文字と派生文字を厳密に立て分けることは困難な場合があるけれども、三種の利用法の設定は漢字系文字の理解にとって極めて有用である。なお、三種の漢字利用法と文字組織との関係は一つ対一ではない。例えば、侗(カム)族の漢字系文字は主に変用文字よりなるけれども変形文字も含まれる(注4)。この点は他の文字組織も同様である。

擬似漢字系文字は、その名の示すとおり漢字に似せて作られた文字という意味であるけれども雑多な文字の集積という面があり、漢字利用の型により細分する必要がある。擬似漢字系文字は、漢字系文字と非漢字系文字に振り分け得る部分があるため、漢字系文字と非漢字系文字の中間に位置づけることとする。

非漢字系文字は、漢字の文字要素に由来するわけではないけれども、漢字との接触により、文字要素を組み合わせて文字を作る原理、表音と表意の方法、縦書き・横書き・分ち書きなどの文字配列法の何れかにおいて影響をうけた文字である。例えば、初期のハングルが右から左への縦書きであるのは漢字との関連を示している。このように系統的には漢字と関係のない非漢字系文字も、漢字関連文字として扱うことにより文字としての性格をさらに明確にすることが可能となる。

以上、漢字関連文字という枠組みに収まる文字どうしの関係を述べた。漢字系文字の中に変用文字・変形文字・派生文字という漢字利用の型を認めるわけであるが、どのような文字組織であれ、必ずしも一つの原理によっているわけではなく、むしろ複数の原理より成り立っているほうが普通であるかもしれない。漢字系文字に属すそれぞれの文字組織が如何なる漢字利用の原理によって成り立っているか、複数の原理から成り立っている場合それらが互いにどのような関係にあるかを明らかにしなければならない(注5)。また、擬似漢字系文字および非漢字系文字は、漢字より如何なる影響をうけたかということにつき一層の考究が必要である。最後になってしまったが、草稿において中村雅之氏に幾つかご指摘いただき訂正を加えた部分がある。記して御礼を申し上げたい。

注

- (1) 西田龍雄 1981「東アジアの文字」『講座言語第5巻 世界の文字』西田龍雄編、大修館書店、1981年初版。いまは1986年4版による。216-278頁。
- (2) 西田龍雄 2002『アジア古代文字の解説』(中央公論新社。もと『アジアの未解説文字』大修館書店、1982年)の付記による。281-282頁。
- (3) 西田龍雄 2001「東アジアの諸文字」『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』(河野

六郎・千野栄一・西田龍雄編著、三省堂、2001年。782-799頁）。西田2001には次のようにある。

1. 漢字文化圏（表意文字群）

- a. 変用漢字：哈尼(ハニ)文字、侗(カム)文字、白文字
- b. 変形漢字：壮(チュワン)文字、字喃(チュー・ノム)、水文字
- c. 派生漢字：仮名、女書
- d. 疑似漢字：契丹文字、西夏文字、女真文字

各用語の定義は明示されない。諸所の記述をみると次のようである。変用漢字については、西田2001「白文字」『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』（721頁）に「同音または近い発音の漢字で白語を書く（変用漢字＝借音）」、「同義または近い意味の漢字で白語を書く（変用漢字＝訓読）」とある。変形漢字については、西田2001「東アジアの諸文字」『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』（786頁）に「漢字の偏、旁、冠など要素の形を改変することなくそのまま活用して、自国語の音形に合わせて組み替え変造するのである」とある。派生漢字の明確な定義はないけれども、西田2001「女書」『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』（707-708頁）に「女書と漢字の字形は類似するが、まったく同形のもの是一字もない」「女書の字形と楷書体漢字との間に一定の関係が成立する」とある。疑似漢字については、西田2001「東アジアの諸文字」『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』（787頁）に「10世紀頃になって漢字文化圏の中で漢字に似た文字、すなわち疑似漢字が登場しはじめた」とある。

なお、白(ハク)文字の項を見ると当該文字組織を「変用・変形漢字」と規定する。一つの文字組織が必ずしも一つの原理によっているわけではないことを考えれば、これは当然の措置である。

用語についても一言しておかなければならない。西田1981および2002は「疑似漢字」とし西田2001は「疑似漢字」とする。「擬」とするか「疑」とするか用字がやや異なるけれどもここでは慣用に従い「疑似漢字」とする。

(4) 趙麗明1991「漢字侗文與方塊侗字」『中国民族古文字研究』第三輯、215-220頁を参照。

(5) この方面の研究として、富田建次2001「チュー・ノム(字喃)」『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』（河野六郎・千野栄一・西田龍雄編著、三省堂、2001年。611-618頁）が参考となる。